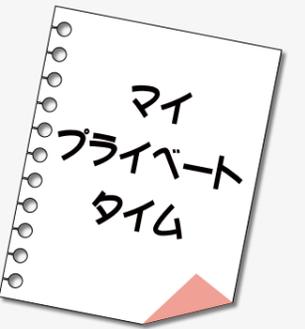


# 「愛郷一念」の政治人生

や さ か きょうすけ  
杵築市長(大分県) 八坂恭介  
*Kyosuke Yasaka*



毎年仮装行列に参加する筆者(左)

市議として、どうすれば杵築市をメジャーにできるかを命題に、青年会議所を設立。当時の平松大分県知事が提唱した「一村一品運動」や、「豊の国づくり塾」などにも積極的に関わり、人の輪が広がりました。当選以来、定例市議会後に『8マシ』という議会報を発行してまいりました。開かれた自治

## 愛郷の城下町

大分県国東半島の付け根にある杵築市は、江戸時代の風情が色濃く残る城下町が特徴です。南北に細長く延びた高台に武家屋敷が並び、谷間の道筋に商家が立ち並び、日本唯一(?)のサンドイッチ型城下町として「九州豊後路の小京都」を称しています。豊かな自然と、人の手ではぐくまれた「グルメ」とともに、観光行政に取り組んでいます。「杵築」は、もともと「木付」と表記されていましたが、江戸時代に幕府との文書のやり取りの中で「杵築」と誤記され、風波を立てぬようにとそれが定着してしまいました。今からちょうど300年前、1712年のことです。



人気の観光スポット: 酔屋の坂

私がこの地で生まれたのは、昭和20年。敗戦から立ち上がる人の力強さや、田舎の人情味ある住民の一体感を目の当

たりにして育ちました。町のにぎわいもあり、江戸時代から300年余続く伝統の「天神祭り」は、子どもの時分から毎年の楽しみになっています。本市も平成大合併にしろ、平成17年、1市1町1村が合併。新市としての一体感の醸成や、町並みの景観保全と活用が求められています。

私は町医者の子に生まれましたが、曾祖父は、明治の町村制時、今は杵築市に編入された初代村長を務め、伯父(父の長兄)・八坂善一郎も戦後の市制施行当時、初代杵築市長でした。伯父は常々、「どんな人であれ、臆する事はない。裸になれば皆、同じ人間だよ」と語り、人情あふれる剛毅な人柄でした。私は高校3年間、市長だった伯父宅に寄宿しており、今振り返れば、この間に政治に対する何かが私の中に芽吹いたのかもしれない。また父の末弟・加藤良六が、昭和47年に三重県伊勢市長に当選。善一郎は自民党のタカ派でしたが、この時は三重県の田村元先生や保守系の先生方に頭を



300余年続く天神祭り

下げてお願いに出向いたとか、「日の丸市長と革新市長」の題材で、当時の週刊誌で騒がれたことが思い出されます。

## 政治家デビュー

青雲の志を胸に愛郷・杵築を離れたのは、昭和39年3月、東京オリンピックの年でした。私の18番、梶光夫さんの「青春の城下町」が発売された

のもこの年です。今は無き夜行列車「高千穂」で杵築駅を学友3人と出発、憧れの東京へ。運良く日本大学法学部に入學。学生時代は演劇・芝居に明け暮れた、正に遊学の4年間でしたが、おかげで日本各地に学友知友を得ました。

その後、大阪の美容学校で昼は学生として学び、夜は講師として教壇に立ち、社会人生活をスタート。職業教育に携わる中で、「人づくりの基本は故郷にあり」と実感。昭和49年、妻と子ども2人を連れて帰郷しました。

昭和50年に、杵築市長の伯父が引退。翌年の市議会議員選挙での立候補を考え

体、住民参画を狙ったもので、住民の皆さんに市政を細やかに説明し、問題点を知ってもらいたいと願って始めたものです。功を奏してか、期ごとに得票が増え、市長選立候補のお誘いもいただくようになりました。

## 今も青春の城下町

最初の市長選の話があったときは、大型の企業誘致が決まった折で、行政の安定を推進すべきと考え、見送りました。市町村合併の話が進む平成14年の市長選挙で、「世代交代」「開かれた行政」「杵築市を売り出す」を掲げ、支持を得ることができました。

ケーブルテレビ網の整備を市内全域で進め、市民の9割以上が加入しています。合併後の一体感、市の出来事を知ってもらいたいと、市民チャンネルも週2回更新と、充実を図っています。

観光行政においては、きものが似合う歴史的町並みをスローガンに、市内の文化財保護に取り組んでいます。城下町を活かした、「観月祭」(城下町一帯に、竹の灯籠を並べ、ろうそくを灯すイベント)や、「ひいなめぐり」(各家に飾った雛を、歩いて回る風習をイベント化)が人気です。これまでの活動で培った人脈のおかげで、ドラマのロケ地に使われるなど、魅力発信にご協力いただ



杵築城とカブトガニの生息する守江湾

ています。また、観光業の自立を目指して、観光協会を民営化、その事務局長を全国から公募し、活性化に努めているところです。不景気のおおりに受けて、人口がこの3年間で5%弱減少しました。全国各地の自治体同様、高齢化が進み、福祉増進と財政健全化も大きな課題です。私は「自助・共助・公助」を訴え、市民の自己負担も粘り強く説明していかなければならないと考えています。杵築市の将来像は、「歴史と文化の薫り高き豊かな感性があふれるまち」です。小さいながらも、昔のような活気と人情あふれる、力強い絆のあるまちを目指しています。